聖トマスに於けるesseとexistereについて（承前）

——existereの意味の探究・第四、トマスの用法——

山田　晶

二三

以上我々は、エクシステレという語が、トマスに於ていかなる意味で用いられて居るかを明にする目的をもつて、まづシュッツとデフェラリ説を批判し、次にこの語の語原的意味を解明したのであるが、(一)いよいよそれを、トマス自身の用例に従つて探究するという仕事にとりかゝるに先立つて、その探究の方法自體に關して生ずると豫想される二つの疑問をあらかじめ提起し、それに對する一應の解答を與えておきたいと思う。

（一）シュッツ説批判、本論文四—九章・哲研四三六號、デフェラリ説批判、第一〇—一五章、哲研四三七號。語原的分析・第一六—二一章・哲研四三八號。

第一の疑問は次の如きものである。——トマスの著作には、比較的初期のもの、中期のもの、及び晩年のものが區別され、そこに或思想の發展の存することが豫想される。(二)その發展は、用語の上にも當然何らかの仕方で反映する筈である。從つてトマスに於ける或用語の意味を探究する者は、それがいつの時期に書かれた著作に於て使用されて居るかということを、たえず注意しなければならない。我々がこれから問題にしようとするエクシステレの意味についても同樣である。もしかゝる顧慮をはらうことなく、たゞこの語の用例のみを無方針にかきあつめるならば、そこに

あつめられた用例がいかに豐富であろうとも、その方法は十分に批判的なものということはできないであろう。更にかゝる年代的顧慮の必要性は、問題がエクシステレの意味にかゝわる時、特に重要となるように思われる。なぜならば、この語の原意が「―から出てくる」であり、古代作家に於ては主としてこの意味で用いられて居ること、及びトマス以後のスコラ哲學に於て、それがエッセンチアに對する「存在」の意味に用いられるようになつたこと、この二つの事實を知る者は、當然次のような豫想をいだくであろうからである。すなわち、トマスは初期の著作ではこの語を「―から出る」とか「あらわれる」とかいう意味で用いて居るが、晩年の著作に於てはむしろ本質に對する存在の意味に用いるようになつて居るというような事實はみとめられないであろうか、と。かゝる豫想をいだく人は、一そうやかましく、この語の用例に關して、著作年代を顧慮すべきことを我々に促すかも知れない。――さてこれに對して我々は答える。我々の調べた限りに於て、この語が著作年代に從つて別の意味に用いられて居るという事實はない、と。この語はトマスに於ては、以下に述べるように、相當多樣の意味で用いられて居る。然しそれらの意味の相違は、この語が使用された著作年代の相違にもとづくというよりはむしろ、この語が使用されている對象の相違にもとづくもののようである。たとえば三位一體論に於てこの語が使用される時は、それはしばしば「―から出てくる」の意味で用いられ、その用例は比較的初期の著作たるロムバルヅス命題集註解に於ても、晩年の神學大全に於ても、同樣にみとめられる。また常に物に卽して考え物に卽して語るという傾向のトマスは、彼が註解しようとする古典的著作のうちにこの語があらわれる時には、その著作に於て用いられて居る意味に從つてなるべくこの語を用いようとして居る。たとえば、ディオニシウス神名論を註解するにあたつては、その著作に於て用いられて居る意味に從つて、この語を主として「存在」の意味に解し、またアウグスチヌスの用例にならつて、この語を「あらわれる」の意味に解して居る如くである。(三) この語のトマスに於ける意味の多樣性は、一にはかゝる彼の綜合的態度にもとづくものと思われる。このように彼に於けるこの語の意味の變化は、著作年代の相違にもとづくというより、むしろこの語が

使用される問題の性格によるものである。――更にこの語の意味の相違がその著作年代の相違にもとづくものでないことを示す有力な證據がある。それは次のものである。すなわち、もしも年代によつてこの語の意味に變化があるとすれば、初期の著作に使用されて後期の著作に用いられなくなつた意味がある筈である。ところが晩年の大著たる神學大全のなかには、他の諸著作のなかに見出されるこの語の意味は、殆んどすべてどこかに見出されるのであつて、このエクシステレという一語に關してすらも、この書はその種々なる意味のスンマ（集成）であるといわれ得るほどである。このように一つの著作のなかにこの語の殆んどすべての意味が見出されるということは、この語の用法に時代的變遷なきことを示す有力な證據ではないか。――またおそらく晩年の著作にエッセのかわりにエッセンチアに對立する意味でエクシステレ、ないしエクシステンチアを使用するようになる傾向がありはしないかという豫想もあたらない。さきにも述べたように、エッセンチアに對してエクシステレないしエクシステンチアが用いられるのはトマス以後の用法であつて、斷じてトマスの用法ではない。――以上の理由にもとづいて、我々は以下の探究に於ては、この語の使用されて居る著作年代は一應顧慮することなく、廣く多くの著作からその用例をあつめようと思う。然しながらやはり探究の中心は神學大全になるであろう。なぜならばたゞこの一語の意味に關していつても、この書はきわめて豐富な寶庫であつて、我々はこの書から學ぶところが最も多いからである。

（二）トマスの著作年代に關しては、ジルソンがその著、トミスムの附錄（Le Thomisme, APPENDICE II, p. 532-533）に、マンドネ（MANDONNET）とグラープマン（GRABMANN）とヴァン・ステンベルゲン（M. F. van Stenbergehen）による年代決定を並記して居る。今一應マンドネ説によると、トマスは一二五四年、三〇歳の時ロムバルヂス命題集註解を以てその著作活動を開始し、死の前年一二七三年四九歳の時、神學大全第三部を未完了でやめて居る。そこで彼の著作活動期間は前後二〇年餘である。それを三期に分つと、前期は三〇歳から三五歳前まで、中期は三五歳前後から四〇歳前後まで、後期はそれ以後ということになる。各時期に書かれた最も主要なる著作をあげると、第一期。命題集註解（一二五四―五六年）、有と本質（五六年）、眞理論（五六―五八年）、能力論（五九―六三年）、この書は前中期にまたがる。ボエチウスの著作註解（五七―五八年）。第二期。對異

教徒大全(五八―六〇年)、ディオニシウス神名論註解(六一年)、隨時論題集(六三―六八年)。ギリシャ人誤謬駁論(六三年)など。第三期は最も圓熟多産な時期であつて、アリストテレス諸著作の註解(六五年以降)、神學大全第一部(六七―六八年)、第二部(六九―七〇年)、第二部の二(七一―七二年)、第三部(七二―七三年)、神學提要(七一―七三年)、其他多數の小論文、及び聖書の註解である。故にごく大まかにいえば、我々はロムバルヴス命題集註解を以て彼の初期を、對異教徒大全を以て中期を、神學大全を以て後期を、代表せしめることができる。なおジルソンの同書はたゞ哲學關係の著作しかとり上げて居ないが、それ以外のたとえば聖書の註解、また各時期に固有なトマスの用語法などを綜合的に概說した著作として、Cheng, Introduction à l'étude de Saint Thomas d'Aquin, Montrial, 1950 參照。

(三) ディオニシウス神名論のラテン譯のなかには、エクシステレないしエクシステンチアという語が非常にしばしば用いられて、それは「存在する」「存在」などを意味する。トマスがこの書を註解するにあたつては、エクシステレをその意味で用いて居る。その用法の若干は本論文第十三章註(八)(一〇)(一一)に引用された。哲研四三七號二〇―二一頁。三位一體、及びアウグスチヌに於けるこの語の用法については後述する。

第二の疑問は次の如きものである。――我々が以下に行わうとするトマスに於けるエクシステレの意味の分類は、相當に微妙なニュアンスの相違にもとづくものである。そこで次の疑問がおこる。我々は何にもとづいてかゝる區分を行うか。ニュアンスによる區分には多分に主觀的な判斷の混入するおそれがあり、かゝる判斷にもとづく區分は客觀的妥當性を缺くのではないか、と。これに對して我々は答える。我々は以下に或原則にもとづいてこの語の意味を數箇の群に區分し、またその各群について數箇の場合を區分し、それによつてこの語の意味の多樣性を、なし得る限り統一的に說明しようと試みるのであるが、然し我々はこの區分の絕對性を主張するわけではない。それはどこまでも一つのこゝろみにすぎない。恐らく他の原則にもとづけば別の區分が行われ得るであろうことを我々はみとめる。しかも我々がこゝでこの語の意味の分類を行う目的は、分類それ自體にあるのではない。むしろかゝる意味の多樣性のうちに一貫するところのこの語の本質的意味を把握することこそは目的なのである。然しながらかゝる本質を把握する爲にも、また把握された本質を言葉でいゝあらわす爲にも、我々はその本質の具現したかたちとしての何らかの

徴表によらねばならない。ところでエクシステレの本質的意味は一であるとしても、その徴表としての意味は多數であり得る。そこで我々は、その本質を最もよく具現して居ると思われる數箇の徴表に着眼し、その徴表のいちぢるしく、いわば典型的にみとめられる用例を、以下にできるだけ體系的に整理して見ようと思うのである。故にその分類がたとい分類として不十分なものであるにしても、そこからこの語の本質的意味を示すいくつかの徴表が指摘され得るならば、我々の目的は達せられたことになろう。またその區分が絶對的でなく、その區分のどちらのうちにも入り得ると解釋される用例があるとしても、それは當然のことである。なぜならば本來この語の本質的意味は一つであり、たゞそれがいかなる徴表をどの程度含んで居るかによつて區分されるのであるから、その程度そのものが連續的であり、また各用例はいくつかの徴表を異る程度にせよ同時に含んで居る限り、その意味の區分が絶對的でなく、連續的となるのは當然のことだからである。以上の理由にもとづいて、我々の分類が絶對的妥當性を主張するものでなく、またその目的上、それを主張する必要もないということは明であろう。――然しながら或用例の意味を判定し、そのニュアンスを規定する爲には、我々はその判斷が單なる主觀におち入ることをさける爲に、できるだけの努力をしなければならぬ。その爲に我々は主として二つの手段を用いようと思う。一つは、或用例に於けるこの語の意味を決定する爲に、前後の脈絡をよく考察し、時にはその語の用いられて居る項目・論題の要旨にまでさかのぼつて、その全體的把握からその意味を決定するように努めることである。第二は、なし得る限りトマスの著作の現代語譯を參照し、それによつて我々の得た結論をたしかめるように努めることである。(四) 勿論我々は必ずしも常にそれらの譯に追隨する必要はなく、却つて時にはその譯を訂正せねばならぬ場合もおこり得るであろうが、とにかくそれらの譯がこの語の意味の把握に大いに役立つことはたしかであろう。要するに我々の區分は決してその絶對的妥當性を主張するものではないこと、我々の目的はこの語の意味を分類することよりむしろ、この語の本質的意味の或徴表をもとめることにあること、かつその意味の判定にあたつては、なるべく主觀性をさける爲に、できるだけの努力をはらうべき

こと、を以て第二の疑問に對する解答にしたいと思う。

（四）我々がトマスに於けるエクシステレの意味理解の爲に參照したトマス著作の近代語譯は次のものである。――神學大全に關して (1) Summa Theologica, tr. Fathers of the English Dominican Province, First Complete American Edition, 3 vols. New York. 1947. 英譯と略記。(2) Sum. Theol. übersetzt von Dominikanern u. Benediktinern Deutschlands und Österreichs, herausgegeben vom Katholischen Akademikerverband, 36 Bände, Salzburg, 1933- 獨譯と略記。(3) La Somme Théologique de St. Thomas, tr. par M. L'abbé Drioux, Paris, 1861- 佛譯と略記。(4) Somme Théologigue, édition de la Revue des Jeunes, Paris, 1925- これは多數の分册より成り、各册譯者がことなるから、たとえばセルチランジュ佛譯フォルゲラ佛譯というように略記する。――對異教徒大全に關して、(1) The Summa Contra Gentiles of St. Thomas Aquinas, tr. by the English Dominican Fathers, London, 1923-1929. 5 vols. 英譯と略記。(2) Sum. contra gentiles, herausgegeben von Kaplan Helmut Fahsel. 4 Bde. Zürich, 1942 獨譯と略記。(3) Contra Gentiles livre 2e, tr. de M. Corvez et De L.-J. Moreav. P. Lethielleux, 1954. 佛譯と略記。――能力論について、(1) On the Power of God, tr. by the English Dominican Fathers, London, 1932-33, 3 Vols. 英譯と略記。

では我々は、いかなる原理にもとづいてこの語の意味を區分するか。――それはさきに探究されたこの語の語源的考察の結果にもとづくものである。すなわちエクシステレはエックスとシステレという二語より成り、この二語をいわば意味の兩極として居る。而してその兩極のいづれに力點が置かれるかに應じて、その意味に相違が生じてくる。そこでまづ第一に、エックスの方に力點が置かれる場合とシステレの方に力點が置かれる場合とが考えられる。まづエックスの方に力點が置かれる時、この語の意味は最も廣い意味での「から出てくる」となり、システレの方に力點が置かれる時、その意味は「立つて居る」になる。かくてまづ第一のエクシステレの意味は大きく「から出てくる」と「立つて居る」とに二分される。――ところで「から出てくる」意味の方に注目すると、「から出てくる」とは常に或もの「から」或もの「え」出てくることであり、「そこから」の端と「そこえ」の端とが前提される。そこで「から出てくる」はたらきを、「そこから」の端から眺めると、それは文字通り「から出てくる」ことであるが、

「そこえ」の端から考察すると、それは「ここえ出てくる」こと、すなわち「あらわれる」ことに外ならぬ。かくて「から出てくる」の意味は、更にせまい意味での「から出てくる」と「あらわれる」とに二分される。——更にこの狭義の「から出てくる」の意味に注目すると、トマスに於てはエクシステレがこの意味で用いられる一般的用法のほかに、特に三位一體論に於けるこの意味での用法が注意されねばならない。かくて狭義での「から出てくる」の意味は、更に一般にこの意味で用いられる場合と、特に三位一體論で用いられる場合とに區分される。——このようにして結局我々は、トマスに於けるエクシステレの意味を、次の四群に大別することができる。第一群、一般的に「から出てくる」の意味。第二群、特に三位一體論に於ける「から出てくる」の意味。第三群、「あらわれる」の意味。第四群、「立つて居る」の意味。この四つである。

ところで我々はこれらの各群について、次のことに注意しなければならない。すなわちこの區分は大きくエックスとシステレのどちらに力點が置かれて居るかによつてなされたものであり、特にエックスの方に力點の置かれて居る場合を「から出てくる」の意味にまとめたのであるが、この場合といえどもシステレの意味が全然消滅したわけでないことは明である。もし全然消滅したとすればエクシステレの意味は單に「から」というだけのことであつて、「でてくる」の意味は持ち得ない筈である。それが「でてくる」の意味を持つて居るということは、「から出てくる」の意味に於てもなおシステレが生きて居ることを證據立てる。從つて「から出てくる」意味でのエクシステレに於ても、やはりエックスとシステレとの兩極の存することは明である。そこでまづ最初の「から出てくる」の意味の群をとつて見ると、この群の内部に於ても、エックスの方に力點が置かれて居るかシステレの方に力點が置かれて居るかによつて、この語の意味の相違が生じてくる。我々はそれを次の四つの場合に區分し得ると思う。すなわち、(一) エックスの方に力點が置かれて居る場合 (二) エックスとシステレとの兩方に力點が置かれて居る場合 (三) システレの方に力點が置かれる場合 (四) どちらにも力點が置かれて居ない場合、この四つである。(五) ——第二、第三群につい

てもこれにほぼ相當する區分をすることができる。ところで第四群は事情が少しことなる。この場合はもともとエックスの意味が稀薄であつて、システレの意味の方が壓倒的に優勢である。この場合はエクシステレはシステレと殆んど同意味になる。たゞシステレの意味が次第に一般化し、稀薄になつて行く過程がみとめられる。この過程に應じて我々は第四群を、㈠　システレの意味が非常に強く殆んどシステレの文字通りの意味である場合　㈡　その意味が一般化した場合　㈢　一層弱まつて補語を必要とする場合　㈣　殆んど「である」の意味になる場合、に區分することが出來ると思う。――以上のようにして我々はエクシステレの意味を、第一群、㈠より㈣まで、第二、第三、第四群同じく㈠より㈣まで、と區分する。この各々の場合にエクシステレがいかなる意味になり、またどのような言葉で飜譯さるべきかということは、以下にこれらの各群について具體的用例に卽して考察して行く時に、逐次說明しよう。

（五）　このうち㈢と㈣の場合は、はじめの區分の原理に矛盾するように見えるかも知れぬ。すなわちはじめにエックスの方に力點の置かれる場合をシステレの方に力點の置かれる場合に對して區分して置きながら、そのうちにエックスよりシステレの方に力點の置かれる場合を考えるのは矛盾して居ると思われるからである。然しこれに對して我々は答える。こゝでは大局的にエックスの方に力點の置かれて居ることは前提されて居る。たゞその前提のもとに於て、相對的な意味でシステレの意味の強い場合を考えて居るのである。すなわち「でてくる」という意味の範圍內に於て、システレの意味の比較的強い場合ないし弱い場合を論じて居るのである、と。

ところで最後に當然問題になることは、以上のエクシステレの意味の分類のなかには、我々にとつて最も重要であるところの、「がある存在」の意味が見當らぬが、それはどこに入るか、ということであろう。――これに對して我々は一應次のように答えて置く。「がある存在」の意味は、これら各群の意味系列の最後の段階に、すなわちエックスもシステレもともにその意味が弱まり一般化した段階に於てあらわれてくるのである、と。從つてこれら各群の最後の段階は、ひとしく「がある」「存在する」の意味になる筈である。その經過は以下に各群について具體的に說明されるであろう。然しそれとともにまた我々は、次のように答えることもできる。「がある存在」の意味は、これら各

群各段階のすべての意味のうちに包含されて居る、と。すなわちこのエクシステレという語がその場合に應じて、いかなるニュアンスをともなつて用いられようとも、結局エグシステレするとはエクシステレ（存在）することに外ならぬのである。この意味では「から出てくる」ことも「あらわれる」ことも「立つて居る」こともすべてひとしく「存在する」ことであり、逆に「存在する」とは何らかの意味で以上のようなことに外ならぬのである。――さてこの二つの解答は一見矛盾するようであるが實はそうでない。然しそれがどのようにして両立し調和するかということは、一應各群の系列を具體的に考察し終つた後に問題にすることにする。かくて我々の次になすべき仕事は二つである。まづ第一に、以上にあげたこの語の意味の分類を、トマスの用例に即して逐次考察することである。第二に、その結論にもとづいて、この語の「存在する」の意味を、最後的に檢討することである。

二三

第一に、一般的にエクシステレが「―から出てくる」の意味で用いられる場合について考察する。――さてエックスとシステレとの合成から、何故「―から出てくる」の意味が出てくるかについては、既にさきにこの語の語原的分析をした際に十分に論ぜられたから今はとかない。たゞこの場合注意すべきは、勿論こゝではエックスの意味が強いが、システレの意味も或力を以てエックス＝システレという合成語全體の意味を規定して居ることである。すなわちエクシステレの「―から出てくる」の意味は、エックスとシステレとの對立緊張關係のうちに成立ち、その力の關係の變化に應じて「―から出てくる」意味そのもののうちに微妙な變化が生じてくるように思はれる。さて両者の緊張關係には次の四つの場合が分たれる。㈠ エックスの意味の強い場合 ㈡ エックスとシステレとひとしく強い場合 ㈢ エックスの力が弱まりシステレの強さが殘る場合。㈣ どちらの力も弱まり一般化する場合。以下この各々の場合につき順次に、トマスの用例に從つて說明しよう。

(一) エックスの意味が強い場合。――この時この語の意味は文字通り「―から出てくる」である。ところで「―から出てくる」とは常に「何か」から出てくることであり、その出てくる「もと(起原)」の何たるかが明示されなければならない。故にエクシステレがこの意味で用いられる場合には、それは常に起原を示す名詞ないし代名詞に、起原表示の前置詞 a, de, ex 等の附加されたものを伴う。以下にその用例をあげる。

(a) 神學大全第一部四二論題二項に、「始原からエクシステレするもの (aliquid ex principio existens) はその始原より後なるものである」[1] 云々。また能力論第五論題一項異論十六に、「無からエクシステレする自然 (natura ex nihilo existens) の固有の運動は、無に向うということである」[2] 云々。またアリストテレス形而上學註解第五卷三講に「結果はより先とより後なる二つの原因からエクシステレする (ab utraque causa existit)」[3] 云々。また ロマ書註解第一章二講に「ダヴィドの裔からエクシステレする或者が (aliquis existens ex semine David) 神の子とされた」[4] 云々。――これらの用例に於て、「始原から」「無から」「原因から」「裔から」エクシステレするといわれる場合のこのエクシステレが、「―から出てくる」「由來する」などの意味であり、またこの「始原」「無」「原因」「裔」などが、何らかの意味でのそこから出てくるもとのものを示して居ることは明である。これらの場合のエクシステレは、起原からの發出を示す動詞 procedere と置換えても大差ないであろう。[5]

(一) I. q. 42, a. 2. Considerandum est quod aliquid ex principio existens posterius esse suo principio. 英譯第一卷、a thing which proceeds from a principle (p. 261). 獨譯第三卷、aus einem Ursprungsgrunde stammt (s. 297). 佛譯第二卷、procède d'un principe (p. 181). なおこれに類する例として (1) De verit. q. 18, a. 7. Filii autem eius, qui non constituebantur ut principium humani generis, sed ut ex principio existentes, 人類の始祖 (principium) としてではなく、そこからエクシステレしたものとして定められたアダムの子孫たちは、云々。

(二) De pot. q. 5, a. 1, ob. 16. proprius motus naturae ex nihilo existentis ut in nihilum tendat. 英譯第二卷 it proceeds from nothing (p. 79). 同じく無からエクシステレするの例として ―― (1) I. q. 41, a. 3. Si ergo Filius pro-

cederet a Patre ut de nihilo existens,....もし子が父から、無からエクシステレする者として發出するとすれば、云々。なおこの例は、かゝる意味で用いられたエクシステレが procedere と同義語であることを證據立てる。(2) I, q. 41, a. 3. Si Filius Dei procederet a Patre quasi existens ex nihilo,....

(三) In V Met. l. 3, n. 786. In secundo enim modo immediate effectus ab utroque causa existit, scilicet priori et posteriori.

(四) In Ad Rom. c. 1, l. 2, n. 36. aliquis existens ex semine David, factus est Filius Dei,....これに類する例として——(1) III. q. 31, a. 2, ad 2. Pater Beatae Mariae, de stirpe David existens, uxorem habuerit de stirpe Aaron. ダヴィドの裔からエクシステレした聖マリアの父、云々。

(五) たゞし de....existens とか a....existens とかいう表現が、必ずしも常に「—から出てくる」の意味で用いられて居るわけでないということは注意を要する。たとえば——(1) I. q. 23, a. 2, ad 4. gratia non ponitur in definitione praedestinationis, quasi aliquid existens de essentia eius. この場合の existens de essentia は「本質から出てきた」ではなくて、「本質に屬するところの」という意味である。すなわち、「恩寵は豫定の定義のうちに、いわば豫定の本質に屬するところの或ものとして措定されるのではない」。英譯第一卷 as something belonging to its essence (p. 127). 獨譯第二卷 als etwas zu ihrem Wesen Gehöriges (s. 239). 佛譯第一卷 comme faisant partie de son essence (p. 451). また——(2) II-II, q. 162, a. 7, ad 2. apostatare a Deo dicitur esse superbiae humanae initium, non quasi aliquid aliud peccatum a superbia existens, sed quia est prima superbia pars. この場合の a superbia は次の existens にかゝつて、「傲慢から出てくる」の意味になるのではなくて、前の aliud にかゝり「—とは別の」という意味である。すなわち「神を棄てることが傲慢の始めといわれるのは、このことが、いわば傲慢とは別であるところの何か他の罪としてあるからではなくて、それが傲慢の最初の部分だからである」。英譯第二卷 not as though it were a distinct sin from pride, (p. 1861). フォルゲラ (FOLGHERA) 佛譯 un péché distinct de l'orgueil (p. 172).——これは全く別系統のエクシステレの用法に屬する。かゝるエクシステレの用法については後述する。

(二) システレがエックスと同等に強い意味を持つ場合。——この時エクシステレは、單に「—から出てくる」のみならず、「—から出てきた」ものが、そのものとして「立つ」に到ることを示す。すなわち「—から出てきて—その

ものとして―立つに到る」ことが、このエクシステレなる一語に含まれる。而してこのことは、事物が何らかのもの「から生成し」ないしは「成立し」てそのものとなることに外ならぬ。故にこの意味でのエクシステレは、「―から生成する」「―から成立する」などと譯さるべきである。なおこの或もの「から」といわれるその「或もの」は(一)の場合と同様、前置詞 a, de, ex などを附加されて伴うが、この場合の「―から」は、單に文字通りの「そこからのもと」を示す「―から」ではなくて、生成ないし成立の「もと」として、生成ないし成立の原因を示す。而して原因には質料因もあれば能動因ないし作動因もあるから、これらの前置詞は「から」よりむしろ「によつて」と譯した方がよい場合が多い。以下にその用例を示す。

(a)　「―から生ずる」と譯すべき場合。――對異教徒大全第三卷一四一章に、「人間本性のうちに、原罪からエクシステレした不秩序 (inordinatio existens ex peccato originali)」(六) 云々。この場合は先の諸例にならつて、不秩序が原罪から出てきたの意味にとれないわけでもないが、この場合の「原罪から」の ex は、單なる起原表示の前置詞ではなくてむしろ原因表示の前置詞であり、從つて上文は、「原罪によつて人間本性のうちに生じた不秩序」と譯さるべきであろう。

(六)　III Gent. c. 141. Sed de hac inordinatione in natura humana existente ex peccato originali, posterius dicetur. 英譯第四卷 this disorder that affects human nature on account of original sin (p. 168) 獨譯第四卷 Von jener Unordnung aber, die sich in der menschlichen Natur auf Grund der Erbsünde vorfindet, ... (s. 363). なお類似例を附加する。――(1) In Ad Rom. c. 10, n. 845. quia eorum ignorantia non fuit invincibilis vel ex necessitate existens, sed quodammodo voluntaria. この用例の ex necessitate existens も單に「必然性からでてきた」の意味ではなくて、「必然性を原因にして」つまり「必然的に生じた」の意味である。全文を譯せば、「彼らの無知はやむを得ないものではなく、また必然的に〔必然性によつて〕生じたものでもなく、或意味に於て故意のものであつた」。――(2) I Gent. c. 17. Si igitur Deus, qui est prima causa, sit causa materialis rerum, sequitur omnia a casu existere. この用例の a casu existere も「偶然からでてくる」ではなくて、「偶然を原因として」すなわち「偶然的に生起する」の意味である。

全文を譯せば、「故にもしも第一原因たる神が、諸事物の質料因であるとすれば、萬物は偶然的に生起するということになる。」獨譯第一卷 daß alles durch Zufall existiere (s. 95)——(3) De pot. q. 3, a. 16. Quidam namque non intelligentes Deum universi esse auctorem, posuerunt materiam non ab alio existentem, et ex eius necessitate rerum diversitatem produci,…この用例の materia non ab alio existens も「他者から出てくるのでない質料」の意味ではない。他者によらずに自分自身によつてエクシステレする質料の意味である。故に全文を譯すと、「或人々は、神が宇宙の創造主たることをさとらずに、他者によつて生じたのでない質料を措定し、その必然性によつて事物の多樣性は產出されるのであるといつた」。他者によつて生じたのでない、ということはそれ自體によつて生じたもの、という意味であるから、その意味で英譯のように、「自己存在的な」'self-existent) と譯してもよい。英譯第一卷、二二頁。

(b) 「—から成立する」と譯すべき場合。——アリストテレス形而上學註解第三卷八講に、「火、空氣、水、土、これらのものから肉や神經もエクシステレして居る」(七)云々。この場合は、肉や神經がこれらのもの「から出てくる」わけでないことは明である。肉や神經はこれらのものを材料として、それらのもの「から成立つ」て居るのであり、この ex は「成立つ」ことのいわば質料因を示して居る。

(七) In III Met. 1. 8, n. 423. ignis, aër, aqua, et terra, ex quibus etiam existunt carnes et nervi. 類例を附加する。——(1) In I Met. 1. 16, n. 257. Sicut posuit aliqua principia, ex quibus componuntur praedicta, ita debuit aliquid ex quo existerent puncta;「上述のものがそれから合成 (componere) されて居る何らかの諸原理を措定した如くに、點がそれから成立つて居る何らかのものを措定すべきであつた」云々。この場合は ex quibus existere という用例の前に、ex quibus componuntur といわれて居るから、この existere が componi とほゞ同じ意味で用いられて居ることが察知される。

(三) エックスの力が弱まりシステレの力が殘る場合。——この時起原ないし原因の觀念は、この語の背後にひきさがつて目立たなくなり、從つて原因や起原表示の語は不必要となる。そしてそれは「—から生ずる」ではなくて端的に「生ずる」ことを、「—から成立する」ではなくて端的に「成立する」ことを示す。かゝるエクシステレは前後の

事情に應じて、「生ずる」「おこる」「成立する」「生成する」などと譯さるべきである。以下に例示する。

（a）「生ずる」ないし「おこる」と譯すべき場合。――たとえばマテオ福音書註解第二八章に、キリストの復活の姿を見て番兵たちが驚いたこと〔マテオ二八章四節、番兵等怖れ慄きて死人の如くなれり、ラゲ譯九九頁〕を説明したなかに、「番兵たちの心のうちには、恐怖がエクシステレした（in eorum cordibus extitit timor）[八]」云々。このエクシステレは、心のうちに恐怖が「存在した」の意味でないことは前後の事情より見て明である。恐怖が「生じた」あるいは「おこつた」の意味でなければならぬ。また神學大全第一部十三論題七項に、「柱そのものに關しては何の變動もエクシステレしなくても（nulla mutatione circa ipsam existente）、動物の位置がかわれば柱は動物の右になる」[九]云々。この場合のエクシステレも、何の變動も「存在しなくとも」というよりは、やはり何の變動も「おこらなくとも」といつた方がよい。なぜならば、變動については通常我々は、變動が「存在する」とはいわず、變動が「おこる」というからである。いや、變動が「存在する」とは變動が「おこる」ことであり、變動の存在仕方は「おこる」ことに外ならぬからである。

（八）In Matt. c. 28, n. 2428. Prae timore autem eius exterriti sunt custodes. Hic ponitur effectus apparitionis, quia in eorum cordibus extitit timor. 類例として――(1) II-II. q. 155, a. 1. Alii vero dicunt continentiam esse per quam aliquis resistit concupiscentiis pravis, quae in eo vehementes existunt. 彼らのうちにはげしくおこつて居る惡しき情慾、云々。

（九）I. q. 13, a. 7. Sicut Columna fit dextra animali, nulla mutatione circa ipsam existente, sed animali translato. 英譯第一卷 without change in itself (p. 66) 獨譯第一卷 ohne daß eine Veränderung an ihr geschieht (s. 285). 佛譯第一卷 sans qu'elle ait cessé pour cela d'être immobile. (p. 239) 變化ないしはたらきがエクシステレするという用例を次にあげる。――(1) IV Gent. c. 20. Prima autem mutatio in rebus a Deo existens, 神によつて諸事物のうちに生ずる第一變化。――(2) In VII Met. l. 10, n. 1845. Ipsa autem operatio partium non existit sine sensu vel aliis operationibus partium animae. 部分のはたらきそのものは、感覺とか運動とか、その他のもろもろのたましいの部分

のはたらきなしにはおこらない。

（b）「成立する」と譯すべき場合。――たとえば能力論第七論題八項に、「神が自分と異る、然し何らかの意味で自分と類似した諸被造物を産出するに應じて、諸被造物と神との間に無限の關係がエクシステレする」(10) 云々。この用例も、「關係が存在する」ではなく、「一に應じて關係が成立する」と譯すべきであろう。

（一〇）De pot. q. 7, a. 8. Et ideo ad summam Dei simplicitatem consequitur quod infinitae habitudines sive relationes existant inter creaturas et ipsum, secundum quod ipse creaturas produxit a seipso diversas, aliqualiter tamen assimilatas. 英譯第二卷 from God's supreme simplicity there results an infinite number of respects or relations between creatures and him,…(p. 48) これに類する例を附加する。――(1) III Quaest, quodl. q. 7, a. 1. Matrimonio autem existente, mulier non habet sui corporis potestatem, sed viri; et similiter et converso. 婚姻が成立すると、妻は自分のからだの權は持たぬ・然し夫のからだの權は持つ、云々。――(2) I. q. 45, a. 3. ob. 3. terminus autem posterius est actione et passione cuius est terminus, et eo existente cessat actio et passio. 終局は能動受動より後のものである、そして終局が成立すると能動受動はやむ。英譯第一卷、as soon as it exists, action and passion cease. (p. 234). 佛譯第二卷 du moment où le terme est produit, (p. 237).

二四

次に（四）エックスもシステレもともに意味が一般化して弱まる場合。――この時エクシステレは「がある」意味での存在を示すことになる。――このことをよく理解する爲に、我々はもう一度(一)から(三)に到るエクシステレの意味の變遷を概觀し、それがこの語の「存在する」の意味といかなる關係があるか、どのようにして「存在する」の意味に近づくか、を考察しよう。

さて以上に述べた(三)の（a）（b）の諸例は、エクシステレを「生ずる」「おこる」「生成する」「成立する」などの

意味に解すべき場合であるが、それらの用例の説明に於て注意したように、これらの場合のエクシステレは、「存在する」の意味にとられる可能性が強い。またそのようにとつても必ずしも間違いというわけではない。たとえば兵士たちの心に恐怖が「生じた」というかわりに「存在した」といゝ、また關係が「成立する」というかわりに「存在する」といつても意味は通るからである。ところが我々がその前に考察した(一)や(二)の場合に於ては、我々はエクシステレを「存在する」とは解しないし、またそう解すれば誤解ないし不適當な解釋となるであろう。たとえば「ダヴィトの裔からエクシステレする」と聞けば何人も「ダヴィドの裔から出てくる」と譯して「―から存在する」とは譯さないであろうし、またそのように譯した場合には、完全な誤謬とはいえないまでも、少くとも不適當な譯となるであろう。同樣に(二)の例で「それらのものから肉や神經はエクシステレする」といわれる時、このエクシステレが「―から成立つ」の意味であることは、何人にも容易に理解されるであろう。そこで次の疑問が生ずる。――なぜ人は(一)(二)の場合には、エクシステレを「存在する」と解する傾向におち入ることなく、またおち入るとすれば誤解をおかしたことになるのに、(三)の場合には人は容易にこれを「存在する」と解したがり、またそう解したとしてもあながち誤解としてとがめられないのであろうか、と。――まづ(一)(二)の場合に人がこれを「存在する」の意味に解する傾向におち入らない理由は明である。というわけは、これらの場合には起原や原因を表示する前置詞を附加されて伴つて居るから、人はこれらの語との關聯に於て、これらのエクシステレが「から出てくる」とか「から生成する」とかいう意味であることを、容易に察知することができるからである。ところがこれに反して(三)の諸例に於ては、エクシステレは起原ないし原因表示の語をともなうことなく單獨に用いられて居る。それ故人は容易にこれらの場合のエクシステレを「存在する」の意味にとるのである。――ではエクシステレが起原や原因表示の語をともなうとはいかなることであるか。それはつまり前にも述べられたように、(一)(二)の場合のエクシステレに於てはエックスの意味が強い、ということに外ならない。故にこの語が起原や原因表示の語をともなわぬ場合は、エックスの意味がそれだけ弱いので

あると解することができる。――ではまた、前の場合にはこの語はぜひとも「―から出てくる」と譯さねばならず、「存在する」と譯してはならないのに、後の場合にはそのように譯してもそれほど不適當でないのは何故であるか。それはこの後の場合にはエクシステレの意味が「存在する」の意味に近くなるからに外ならぬ。――そこで我々は以上に考察してきたことを綜合して次のように結論することが許されるであろう。「―から出てくる」の意味でのエクシステレは、そのエックスの意味が弱まるにつれて「存在する」の意味に近づく、と。

それにもかゝわらず㈢の場合の各用例に於ては、エクシステレを「存在する」と譯すよりも「生ずる」「おこる」「生成する」「成立する」などと解する方がよいことはなお比較的明である。これらのエクシステレの意味を「存在する」の意味と同一視することはまだできず、「―から出てくる」の意味はこの㈢の諸用例に於ては、なお強く殘存して居るのである。それはなぜであろうか。けだしこれらの場合のエクシステレに於ては、エックスの意味は弱いとはいえ、まだ多少の力をとゞめて居り、その力がシステレの意味の力にはたらきかけて、この語をして單に「立つて居る」ではなく「―から出て―立つに到る」すなわち「生成する」の意味たらしめるからである。そこで我々は次のような豫想をいだく。すなわち、さきに結論したように、エクシステレのエックスの意味が弱まるにつれて、この語は「―から出てくる」の意味から、一般的な「存在する」の意味に近づいて行つたのであるから、もしその上にシステレの意味も弱まり一般化して行つたならば、すなわちエックスとシステレどちらもその意味が一般化し稀薄になつて行つたならば、結局「―から出てくる」の意味は「存在する」の意味に歸一してしまうのではないか、と。

かゝる豫想をもつて考察すると、我々は「生ずる」ないし「生成する」の意味にもとれるし、「存在する」ないし「がある」の意味にもとれる例をトマスの用例のうちに見出すことができる。こゝにはその代表的な二例をあげよう。

（a）　トマスはアリストテレス形而上學註解第三卷十一講に於て、「愛はエクシステレの原因ではない」という同書

のラテン譯テキストを註解して、「愛は生成ないしエクシステレすることの原因（causa generationis vel existendi）ではない」云々といつて居る。[二] さてこの場合のエクシステレは「生成」の意味に解すべきかそれとも「存在」の意味に解すべきかが問題となる。――まづ生成の意味であると思われる。その理由は二つある。一つはこゝに論ぜられて居る前後の事情からである。すなわちアリストテレスは同所に於て、愛と爭とを生成消滅の二原理として措定したエムペドクレス説を反駁して、「愛はエクシステレの原因ではない」といつて居るのであるから、このエクシステレが、消滅に對する生成を意味することは明である。[二] 第二の理由は「ないし」（vel）という語の用法である。[三] この語は通常「すなわち」「いゝかえれば」という程どの意味である。故に「生成ないしエクシステレすることの原因」とは「生成すなわちいゝかえればエクシステレすることの原因」という意味であつて、この場合のエクシステレが「生成」と同義語であることを示して居る。そこで我々は、アリストテレスの「愛はエクシステレの原因ではない」というラテン譯テキストを解説して、トマスが特に「生成の」という語を挿入して「愛は生成のないしはエクシステレすることの原因ではない」といつたわけを次のように解することができる。すなわちトマスは「愛はエクシステレの原因ではない」というラテン譯テキストを讀み、その前後の事情からこのエクシステレは「生成」を意味すると判斷し「生成の」という語を挿入することによつて、このエクシステレが生成を意味することを明にしたのである、と。もしこの解釋にあやまりがないならば、この場合のエクシステレは生成の意味に用いられて居ることは確である。――ところがこれに對して、このエクステレは「存在」の意味にとらるべきだという説も成立つ。この説はアリストテレスの原文そのものにもとづく。すなわちこのラテン譯に相當するギリシヤ原典をしらべて見ると、「愛はエイナイの原因ではない」となつて居る。ラテン譯者はこのエイナイ（εἶναι）をエクシステレと譯したのであり、從つてこのエクシステレはエイナイの直譯としてのエッセ（esse）と同義語でなければならない。故にそれを解説したトマスもこのエクシステレはエッセすなわち「存在」の意味に解して居た筈である、と。ではかゝる解釋の立場に於ては、さき

の「ないし」(vel) の意味はどのように解さるべきであるか。これに對しては次のように答えられるであろう。「ないし」には「すなわち」の外に選言的な「あるいは」の意味がある。この場合はその意味であつて、トマスはこゝでは一應「生成」と「存在」とを區別して、「愛は生成あるいは存在（エクシステレ）の原因ではない」といつて居るのである。故にこの場合のエクシステレは存在の意味である、と。これはアリストテレスの原典にもとづき、トマスの解釋がその原典の解釋としても正當であるということを、できるだけ好意的に辯護しようとする場合に生じてくる解釋であろう。――この說に對して、この場合のエクシステレはやはり「生成」の意味であるという前說を固執するならば、結局トマスはアリストテレスを誤解したという結論におちいるであろう。しかもその誤解はトマスにとつて不可避的であり、かつ容認さるべきものである。なぜならばトマスは、直接にギリシヤ語原典によらずにラテン譯によつて註解したのであるから、その譯にエクシステレとあれば、これを前後の事情から見て「生成」の意味にとるのは當然である。故に責はむしろエイナイをエッセと譯さずにエクシステレと譯した譯者の側にあることになる。――かくて我々は次の結論を得る。アリストテレスは「愛はエイナイ（存在）の原因ではない」といつた。ラテン譯者はエイナイをエクシステレと譯した。故にラテン譯者の意圖に於てはこのエクシステレは「存在」の意味にとられて居た。ところがそのラテン譯によつたトマスは、このエクシステレを前後の事情から「生成」の意味にとつたのである、と。

ところでこのいさゝかややこしい經過の說明は、エクシステレの意味に「生成」と「存在」との二つを强いて區分しようとするところから生ずるものである。これをもしも「存在」という語はこの場合にはそれ自體のうちに「生成」の意味を含んで居る、と解するならば、事柄はもつと容易に理解されるであろう。アリストテレス自身こゝではエイナイをば、メー・オン（非有）に對立する意味に於てではく、プトラ（消滅）に對立する意味で用いて居る。（τὸ νεῖκος μᾶλλον φθορᾶς ἢ τοῦ εἶναι αἴτιον）故にこの場合はエイナイという語それ自體のうちに「生成」の

意味が含まれて居る。さればこそラテン譯者は、このエイナイをばエッセと譯さずに「存在」と「生成」との二つの意味を含むエクシステレという語によつて譯したのである。もしこのように理解することが許されるとすれば、我々はエクシステレのエイナイの譯語としての「存在」の意味を保ちつゝ、かつそれを「生成」の意味に解したトマス説を、正しい原典の解釋としても容認することができるのではないか。要するにこゝで論ぜられて居るのは、生成することが存在することであり、存在することが生成することである、という場合である。――なおかゝるエクシステレの意味を、この語の「――から出てくる」の意味の發展を辿つてきた我々の見地から説明するならば、この場合のエクシステレは、エックスの意味もシステレの意味も一般化して、殆んど「存在」の意味になつて居る場合の一例であると解することができるであろう。

(一) In III Met. l. 11, n. 477. amor non est causa generationis vel existendi.

(二) アリストテレスの原文は次の如くである。III Met. c. 4, 1000 b 9-12. ἀλλ' ὅθεν ὅτι ὁ λόγος, τοῦτό γε φανερόν, ὅτιν συμβαίνειν αὐτῷ τὸ νεῖκος μᾶλλον φθορᾶς ἢ τοῦ εἶναι αἴτιον ὁμοίως δ' οὐδ' ἡ φιλία τοῦ εἶναι, συνάγουσα γὰρ εἰς τὸ ἓν φθείρει τὰ ἄλλα. 岩崎譯、形而上學、七三頁、エムペドクレスに於ては鬪爭は破壞の原因であるとともに存在の原因でもあり、同じ樣にして、友愛も亦單に存在の原因たるにとゞまらぬことは明である。というわけは、事物を一つに統合することによつて、他のものを破壞するからである。Ross, Metaphysics, Vol. I, Comment. p. 239, Similarly love is not the cause of being any more than of destruction.――同書をトマスがそれによつて註解したところのラテン古譯 (VERSIO ANTIQUA) は次のように譯して居る。Sed unde ratio haec etiam palam, quia accidit ei odium non magis corruptionis quam existendi causam. Similiter autem nec amor existendi: colligens enim in unum corrumpit alia. ed. (CATHALA, p. 130) ――この箇所でアリストテレスは愛がエイナイの、爭が破壞の原因である、というエムペドクレス説を次の論據によつて論破して居る。すなわち一方の生成は他方の消滅である。故に愛が或一つのものを生成せしめると同時に、それは他者を消滅せしめて居る筈である。故に愛はエイナイの原因であるとともに破壞の原因でもある。同樣に爭は破壞の原因であるとともにエイナイの原因でもある。かくて兩者をエイナイと破壞との二原因として措定するエムペドクレス説は矛盾におちいる、と。この

場合のエイナイが生成の意味を含んだ存在であつて、生成に對立的に區別される意味での存在でないことは明であろう。なお同所のトマス註解は I. 11, n. 477. 參照。

（三）「ないし」(vel) には三つの意味がある。一つの意味は、AかないしBか、どちらをいつてもよい、という意味であつて、AとBとが互に他を排除し合うことがない。この場合の「ないし」は「すなわち」或は「あるいは別の言葉でいえば、あるいはこういつてもよいが、あるいはむしろ」というほどの意味となる。もう一つの意味は純然たる二者擇一であつて、互に他を排除する。すなわち「Aであるかそれともあるか」の意味となる。第三はこの兩者を綜合したような意味であつて「Aか或は更にB」「Aか、或はBといつた方がよい」の意味である。この場合AとBとは必ずしも同じでない。然し互に排除するのでもない。AよりBの方が廣く、AはBのうちに含まれるという關係にある。本文に提示した第一の解釋は vel を第一の意味にとり、第二の解釋は第二の意味をとり、我々が最後に到達した解釋は第三の意味にとる。すなわち causa generationis vel existendi といえば、生成の原因、あるいはもつと廣くいつてエクシステレの原因というほどの意味であつて、このヴェルによつて、生成とエクシステレとは必ずしも同義語ではないが、兩者は必ずしも排除する概念でなく、生成は廣い意味でのエクシステレのうちに含まれることが示される。而してヴェルは一般にかゝるニュアンスをもつて使用されるのであり、Causa generationis vel existendi という表現は生成とエクシステレとの關係をよくあらわして居るということができる。LEWIS, p. 1963. QUICHERAT, p. 1468. MENGE, s. 788. 參照。

（b）對異教徒大全第三卷六章に、或ものが「ない」ことは端的な意味で自然の意圖ではなく、自然の意圖は常に或ものを「あら」しめることに存する。たゞ或ものが「ある」ことに附隨して、他の或ものが「ない」ことがおこるということを説いて次のようにいつて居る。「たとえば水がないということは、自然の絶對的な意圖に屬することではなく、自然の意圖に屬するのは空氣があるということである。この空氣がエクシステレすると水はない」(quo existente non est aqua)(四)——さてこの用例に於ける「空氣がエクシステレすれば」云々は、「空氣が存在すれば水は存在しない」というように譯すこともできるが、また「空氣が生ずると水はなくなる」というように生成の意味に解することもできる。譯そのものは前後の事情によることであるが、より本質的にいえば、これは、エクシステレはその生成の意味が最も一般化する時、「がある」「存在する」の意味になる一例であると思われる。逆にいえば、

「がある」「存在する」ということは「生ずる」「おこる」「生成する」「成立する」などの意味をば、きわめて一般的な稀薄なかたちにせよとにかく含んで居る、ことを證據立てるものといわれないであろうか。

（四）III Gent. c. 6. Non enim est de intentione naturae absoluta quod non sit aqua, sed quod sit aer, quo existente non est aqua. 英譯第四卷 the existence of which precludes the existence of air (p. 14) 獨譯第三卷 Luft zu sein, deren Existenz die des Wassers ausschliesst.

以上我々はエクシステレの「から出てくる」の意味の系列を辿つて、㈠ 文字通り「から出てくる」㈡「一から生成、成立する」㈢「生成、成立する」㈣「存在する」の意味に到つた。この系列の探究の結果得られた結論のうち最も重要なものとして、特に次の二つを指摘しておきたい。第一に「一から出てくる」の意味は最も一般化すると「存在する」の意味になること、第二に、しかもこの系列に屬するすべての意味はエクシステレという一語のもとに含まれて居ること、これである。

二五

第二に、特に三位一體論に於て、エクシステレが「一から出てくる」の意味で使用される場合を考察しよう。その前に、父・子・聖靈という三つのペルソナ相互の關係について、簡單に說明して置く必要があると思われる。さきにも述べられたように〔本論文第七章・哲研四三六號・四〇—四三頁參照〕、この三つのペルソナは、神自身のうちに發出する一つの知性的言葉と、その言葉の生み出される始原と、この兩者間に發出する愛との三つの關係に於て成立つものである。この三者は本質的には一なる神であるが、發出の起原の秩序に從つて相互に區別される。まづ第一に父のペルソナは、そこから他者が發出するが、それ自體は何ものからも生ぜざるものとして、始原（principium）の性格を有する。(二) 次に子のペルソナは、神の知性の一つのはたらきによつて神のうちに成立つ一つの概念（Conceptus）で

あるが、他者から、すなわち思惟者から、思惟者自身のうちに發出するものであることは、概念の本質に屬する。それ故子のペルソナの因有性は、父からの發出者（procedens a Patre）ということである。[二] 次に聖靈のペルソナは、神自身のうちに神から發出する神の愛である。ところで何かが愛される爲には、その愛の對象はまづ以て知性の概念に於て把握されて居なければならぬ。從つて神の愛としての聖靈のペルソナは、神の言葉として子のペルソナから發出するといわれ得る。[三] 然しながら、子から聖靈が發出するということそれ自體を、子はその始原たる父に負うて居る。その意味で聖靈は子を通して父から發出する者（procedens per Filium a Patre）といわれるのである。以上を要約して次のようにいうことができる。父のペルソナは發出するペルソナの始原であつてそれ自身は何者からも發出しない。子は父から發出する。聖靈は子を通して父から、從つて父と子との兩方から發出する。以上が三つのペルソナ相互の發出起原にもとづく秩序關係である。

（一）父のペルソナは、そこから他者が發出するもととして始原（principium）といわれる。I. q. 33, a. 1. hoc nomen principium nihil aliud significat quam id a quo aliquid procedit; omne enim a quo aliquid procedit quocumque modo, dicimus esse principium, et e converso. Cum ergo Pater sit a quo procedit alius, sequitur quod Pater est principium.

（二）言葉の固有性は他者からの發出者たることである。I, q. 34, a. 1. Dicitur autem proprie verbum in Deo secundum quod verbum significat conceptum intellectus.…Ipse autem conceptus cordis de ratione sua habet quod ab alio procedat, scilicet a notitia concipientis. Unde verbum, secundum quod proprie dicitur in divinis, significat aliquid ab alio procedens.

（三）聖靈は子から發出する。I q. 36, a. 2. Dictum enim est supra quod Filius procedit per modum intellectus ut verbum; Spiritus Sanctus autem per modum voluntatis ut amor. Necesse est autem quod amor a verbo procedat; non enim aliquid amamus, nisi secundum quod conceptione mentis apprehendimus. Unde et secundum hoc manifestum est quod Spiritus Sanctus procedit a Filio.

（四）父は子を通して聖靈を發出する。I q. 36, a. 3. Quia igitur Filius habet a Patre quod ab eo procedat Spiritus

Sanctus, potest dici quod Pater per Filium spirat Spiritum Sanctum, vel quod Spiritus Sanctus procedat a Pater per Filium, quod idem est.

さてそこでペルソナの發出についても「—から出てくる」といわれるわけであり、この發出を示す爲に、今引用した諸例に於て明なように、通常は procedere という動詞が使用されるが、この語のかわりにエクシステレが用いられて居るように見える場合が相當に多い。然し仔細に吟味すると、プロチェーデレとエクシステレとは必ずしも同義語であるわけではなく、或場合は兩者殆んど同義と見てよいが、或場合はエクシステレは特別の意味をもつてペルソナの發出について用いられて居るようである。以下その用法を順次に考察して行くことにする。この第二群に於ても第一群に於けると同樣に、㈠　エックスの意味強き場合　㈡　エックスとシステレ兩語の意味強き場合　㈢　システレの意味強き場合　㈣　どちらも弱い場合、を區分することができる。ただし第一群と第二群との系列は、必ずしも正確に對應するわけではなく、その系列の或段階に於ては、第一群にみとめられなかつた特殊な意味で出てくるが、その意味の特殊性をよりよく理解する爲にも、一應兩群をこのように對應する段階に分けて考えてみることは適當であろう。

㈠　エックスの意味が強い場合。——この時エクシステレは「—から出てくる」の意味であり、特に三位一體論に於ては「發出する」と譯され、プロチェーデレと殆んど同義である。子が父から、聖靈が子から、聖靈が父から、聖靈が父と子から「發出する」ことと、また父がいかなるペルソナからも「發出しない」ことを示す爲に、この語が用いられて居る。これらの場合、發出の起原を示すペルソナは、起原表示の前置詞 a を附加されて伴う。以下に用例をあげる。

（a）　子が父から發出することを示す例。——ヨハネ福音書註解第一章に、「父からエクシステレする子（Filius existens a Patre）は父を明らかにする」云々。(五)

（b）聖靈が子から發出することを示す例。――同書の上文にひきつゞいて「子からエクシステレする聖靈（Spiritus Sanctus a Filio existens）は子を明らかにする」[六]云々。またギリシヤ人誤謬駁論第二五章に「子は、子から永遠にエクシステレするものとしての聖靈（Spiritus Sancti sicut a se〔Filio〕aeternaliter existentis）の始原である」[七]云々。

（c）聖靈が父から發出することを示す例。――ギリシヤ人誤謬駁論第一章に「聖靈は……父から永遠的にエクシステレする（Spiritus Sanctus ab ipso〔Patre〕…aeternaliter existit）から父に屬する」[八]云々。

（d）父が他者から發出せざるものであることを示す例。――能力論第十論題五項に「神のうちに二つの不生者、すなわち何らかのものからエクシステレしないもの（non ab aliquo existentes）を措定すると、二つの神々を措定することになる」[九]云々。

以上は典型的な例であるが、或ペルソナの他のペルソナからの發出を示す爲に、エクシステレという語は多くの著作のうちに散見する[一〇]。それ故我々は次のように結論することができる。――三位一體に於けるペルソナの發出關係はエクシステレという動詞によつて示され得る。その限りに於てエクシステレは、同じくペルソナの發出を示す動詞プロチェーデレと置換され得る。

（五）In Ioan. c. 1, n. 268. Sicut Filius existens a Patre, manifestat Patrem…, ita et Spiritus Sanctus a Filio existens, Filium manifestat.

（六）前參照。

（七）Cont. err. gr. c. 25, n. 1110. Ex quo etiam habetur quod Filius sit principium Spiritus sancti sicut a se aeternaliter existentis.

（八）Cont. err. gr. c. 1, n. 1083. Si ergo Patris est〔Spiritus Sanctus〕, non solum quia ab ipso temporaliter detur et mittitur, sed etiam quia ab ipso aeternaliter existit;…

（九）De pot. q. 10, a. 5. Hilarius dicit, quod ponere in divinis duos ingenitos, idest non ab aliquo existentes, est

ponere duos Deos; ...英譯第三卷 who do not derive existence from another p. 223).

(一〇) その若干例を附加する。(1) I. q. 32, a. 3. ad 5. Filius et Spiritus Sanctus non conveniunt in uno speciali modo existendi a Patre;...子と聖靈とが父からエクシステレする仕方。英譯第一卷 The Son and the Holy Ghost do not agree in one special mode of existence derived from the Father (p. 172) 獨譯第三卷 in der besonderen Weise..., in welcher sie vom Vater sind s. 115) 佛譯第二卷 la même manière spéciale de procéder du Père (p. 31)——(2) I Sent. d. 15, q. 1, a. 2, ad 4. et ideo communis est duobus personis ab alio existentibus, 他のペルソナからエクシステレする二つのペルソナ。——(3) De pot. q. 10, a. 4, ad 14. et secundum hoc...concludi potest, si Spiritus Sanctus a Filio mittitur, quod aeternaliter ab eo existat. 聖靈は子から永遠にエクシステレする。——(4) Cont. err. gr. c. 2, n. 1084. Patet ergo quod ex hoc quod Spiritus Sanctus mittitur a Filio, sequitur quod a Filio existat aeternaliter,...——(5) I q. 33, a. 4, ob. 4. Sed cum sint plures ab alio procedentes in divinis, nihil videtur prohibere quin etiam sint plures ab alio non existentes. 神のうちに他者から發出するものがいくつかあるとすれば、同樣に他者からエクシステレしないものがいくつかあつてもよいではないか、という異論。

(二) システレがエックスと同等に強い力を持つ場合。——この時エクシステレは、單に或ペルソナが他のペルソナ「から出てくる」ことだけでなく、その出てきたペルソナが、そのペルソナとして「立つて居る」こと、すなわち自立して居ることを示す。從つてこの場合には、エクシステレはその一語のうちに「—から出てきて—立つて居る」という二つの意味を含むことになる。そのように解さざるを得ない場合を次にあげる。

(a) ギリシヤ人誤謬駁論第十四章に曰く、「上述の博士たちは、聖靈は...子からエクシステレするという。このことはたゞ聖靈の永遠的發出についてのみいわれることである。なぜなら各事物は、それ自體としてある限りにおいてのみエクシステレするものだからである」[二]云々。——さてこの文章のうちにエクシステレという語は二つ出てくる。すなわちまづ、聖靈は子からエクシステレする(existere a Filio)といわれ、我々はこれを前記(一)の場合の諸用例に從つて、聖靈が子「から發出する」の意味にとる。ところが第二のエクシステレはその意味にとることができ

ない。なぜならばこゝではエクシステレの意味を説明して、「各事物はそれ自體としてある限りに於て（secundum quod in se est）エクシステレする」といわれて居る。ところで「それ自體としてある」（in se est）とは、さきのスブシステレの定義のうちにも用いられたように〔本論文第七章註（一）（二）參照・哲研四三六號三三頁〕、獨立的存在者としてあること、すなわち自存ないし自立することに外ならぬ。故に上文に出てくる第二のエクシステレは「から發出する」ではなく「自立する」の意味である。――そこでこの文のこの二つのエクシステレの意味について次の疑問が生ずる。この場合、前のエクシステレは「―から發出する」の意味で、後のエクシステレは「自立的に存在する」の意味なのであるか。とすればトマスは殆んど隣接する箇所に於て、同じ語を異義的に用いて居ることになる。然しそのように解することは少くともこの用例に於ては不可能である。なぜならこゝでは、聖靈が子からエクシステレすることの説明として、「けだし（enim）各事物はそれ自體としてある限りに於て、エクシステレするといわれる」云々と述べられて居るのであるから、この二つのエクシステレは絶對に同義的なものと解されねばならぬ。とすれば前のエクシステレも「子から發出する」ではなく「子から自立的に存在する」の意味であつて、そのうちに全然發出の意味を含まぬのであるか。とすればこの場合の「子からエクシステレする」という表現は、我々がさきに(一)の場合として考察した諸用例と、その形式（existere a～）は同じだが、意味内容は全然異るのであるか。然しそのように解するのはやはり無理である。なぜなら同書の同文の前後には、明に「―から出てくる」の意味で同様の表現形式がしばしば用いられて居るから、この場合だけ表現形式は同じでも意味内容は異るということは考えられぬからである。かくて我々はこの二つの隣接するエクシステレの意味をどのように理解すべきかについてジレンマにおち入る。

さてこのジレンマは、我々がこの場合のエクシスレの意味を、「發出する」か「自立する」かのいづれかにきめつけようとする、二者擇一の立場を固守する限り、決してのがれることができない。これに反しもしも綜合の立場をとつて、この場合のエクシステレは「から發出する」と「自立して居る」という二つの意味を含んで居る、と解するな

らば、問題は容易にとけるであろう。すなわちこゝで聖靈のペルソナについて、それが子からプロチェーデレするといわれずにエクシステレするといわれる所以は、聖靈が單に子「から發出する」だけでなく、子「から發出して」しかも聖靈のペルソナとして獨立に「自立して居る」ことを示す爲なのである。故にこゝではエクシステレは、そのエックスの意味とともに、特にシステレの意味が強調されて居る、ということができる。

（一一）Cont. err. gr. c. 14, n. 1099. quia praedicti Doctores non solum dicunt quod Spiritus Sanctus est a Filio, quod posset referri ad temporalem missionem, sed etiam quod a Filio existit, quod non potest referri nisi ad aeternam processionem; existit enim unumquodque secundum quod in se est.

（b）ところで今考察したように、この用例に於けるエクシステレが、「から發出する」と「自立して居る」という二つの意味を含んで居るとすれば、同じことは我々がさきに考察したペルソナの發出について用いられるすべてのエクシステレについてもいわれるのではないか。すなわちこれらすべての用例に於けるエクシステレは、單に「發出する」ではなくて同時に「自立する」の意味も含むのであり、從つていかなる場合にもエクシステレはプロチェーデレと完全な同義語といわれ得ぬのではないか、という疑問が生ずるであろう。――この疑問はあたつて居る。たしかにエクシステレはプロチェーデレと、嚴密にいえばいかなる場合も決して同義語ということはできない。(一二) なぜならばプロチェーデレが、單に或ものが或もの「から出てくる」という發出のはたらきしか示さないのに對して、エクシステレの方は、それがやはり一種のシステレの仕方である限り、常に何らかの意味での「立つて居る」ことを含意して居るからである。然しながらこのシステレの意味が弱まり一般化する時、その意味は殆んどプロチェーデレと同樣になる。(一)にあげた用例の大部分は大ていそのような場合である。これに對して今（a）項に於て考察された用例は、エクシステレのシステレ性が特に強調されて居る場合である。かゝる例はなお外にもある。次例を見よ。

（一二）それ故近代語譯に於ても、エクシステレのかゝる二重性に特に顧慮をはらつて譯して居るものがみとめられる。たとえば

本章註(一〇)の(1)として引用した modus existendi a Patre をば、佛譯は「父から出てくる仕方」(la même manière…de procéder du Père) と譯して居るのに對して英譯はていねいに、「父から由來する存在の仕方」(mode of existence derived from the Father) と譯して二つの意味をあらわして居る。

（c）すなわち命題集註解第一卷二三區分一論題二項異論解答三に、「聖ヴィクトールのリカルヅスによれば、神のペルソナは起原の固有性によつて區別されるという意味に於て、subsistere するというよりむしろ existere するものである。…故に神のペルソナはスブシステンチアではなくてむしろエクシステンチアである」(一三) 云々。――これによればリカルヅスは、ペルソナの存在仕方を示す爲に、スブシステレよりむしろエクシステレの語の方をえらんだ。なぜならペルソナは、起原「から出てくるもの」という性格とともに、そのペルソナとして「自立して居る」ものという性格を含んで居る。ところでスブシステレという語は、たゞペルソナの自立的存在ないし自存ということしか示さないのに對し、エクシステレは起原發出性と自存性という二つの意味を一語のうちに含んで居る。故にそれはペルソナの存在仕方を示す爲に最も適當な語であると考えられたのである。――さてトマス自身は、ペルソナの存在仕方を示す爲には、既に述べられたように〔本論文第七章・哲研四三六號四〇―四二頁參照〕、エクシステレよりスブシステレの語の方を採用して居るから、リカルヅスの主張はそのまゝトマスのものということはできない。然しながらリカルヅスがエクシステレの方をペルソナについて使用すべきだと主張する眞意は十分にトマスによつて理解されて居る。故に我々は結論として次のようにいうことができる。――トマスに於てエクシステレという動詞がペルソナに關して用いられる場合、それは或ペルソナが他のペルソナから發出することとともに、發出したペルソナ自身の自立性を示す。或場合には發出性の方に重點が置かれるが〔一〕の場合〕、或場合には自性立が特に强調される。この後の場合は〔二〕システレがエックスと同樣に强い力を有して居る。

（一三） I Sent. d. 23, q. 1, a. 1, ad 3. Richardus de Sancto Victore…volens proprie loqui, dicit, quod personae

divinae non subsistunt, sed existunt, inquantum scilicet distinguuntur proprietatibus originis,…; et ideo diversas personas non dicit esse subsistentias, sed existentias. ——なを(1) I. q. 29, a. 3, ad 4 には、リカルヅスのペルソナの定義として次のものがあげられて居る。RICHARDUS de Sancto VICTORE, De Trin. Lib. IV, c. 22 (PL 196, 945): persona est divinae naturae in communicabilis existentia. ——(2)またリカルヅスがスブシステレよりむしろエクシステレの語の方を用いた理由として次のようにいつて居る。I Sent. d. 34, q. 1, a. 1, ad 3. proprie loquendo, non est in divinis aliquid sub alio; unde supra Augustinus non recipit nomen substantiae in divinis; et etiam Richardus de Sancto Victore nomen subsistentiae in nomen existentiae mutavit.

二六

さて我々はさきに第一群の考察に於て〔第二三章〕、(二)の段階でエックスと同等にシステレの意味が強まる時、エクシステレの意味は「一から生成する」ないし「一によつて成立する」等になることを見た。ところが只今考察したペルソナの發出の場合には、(二)の段階は「生成」ないし「成立」の意味にならず、「一から出てきて一自立して居る」こと、すなわちペルソナの起原關係を含意することになる。このように第一群の(二)と第二群の(二)とは、同じくエックスとシステレとの兩項が強調されて居るにしても、その力點の置かれる所はことなつて居る。すなわち第一群の(二)に於ては、「一から出てきて一立つて居る」という二つの意味のシラブルの中間に力點が置かれ、從つて「一から出てくる」ことと「立つて居る」こととの間に成立つはたらき、すなわち「一から出てきて一立つ一に到る」はたらきが注意されて居る。而してかゝるはたらきは生成に外ならぬ。故にエクシステレは「一から生成する」の意味となるのである。ところが三位一體論に於ける(二)の段階では、「一から出てくる」と「立つて居る」とは、エクシステレの意味の兩極として對等に強調されて居るから、その意味は「一から出てきて一立つに一到る」はたらきではなくて、「一から出てきて一立つて一居る」ことになる。これは單に言語上の相違にすぎぬが、かゝる意味の相違が生じてき

た事態そのものにその相違の原因をたづねると、次のようにいうことができるように思われる。すなわち一般の場合には、何かが他者「から出てきて—立つ」ということは、常に動的時間的過程として時間的ないし時間との類比に於て把握され、それは生成ないし成立といわれるにふさわしい。これに反してペルソナの發出に於ては、或ペルソナが他のペルソナ「から出てきて—立つ」ということは、時間的過程に於ておこることでなくて永遠の今に於けることであり、從つてこの「—から出てきて—立つて居る」ことは時間的過程としての生成をともなわず、たゞ神自身のうちに永遠的に存在する起原にもとづく自立する三つのペルソナの相互關係を示すにすぎない。故にペルソナの發出は生成とはならないのである。〔尤も父から子が生ずることを示す爲に generatio という語が用いられるが、これは「生成」ではなく「出生」と譯さるべきである〕——ところがもしもペルソナの發出について、何らかの意味で「—から出てきて—立つて居る」ということが、時間的過程に於ていわれるような事態があるとすれば、その場合に用いられるエクシステレはまたちがつた意味をとるであろうことが豫想される。それはペルソナが永遠から時間の世界え發出すること、すなわちペルソナの派遣についてこの語が用いられる場合である。

三位一體論に於て、ペルソナの發出と派遣との概念は嚴密に區別されねばならぬ。トマスは神學大全第一部四三論題に於て派遣について論じて居るから、それにもとづいて派遣の概念を説明し、次に派遣についてどのようにエクシステレという語が用いられるかを見よう。——まづ一般的にいつて、派遣する（mittere）という語は、そのうちに二つの意味を含んで居る。一つは派遣者の派遣される者に對する關係である。すなわち派遣するとは常に「誰かが誰かを」派遣することに外ならぬ。もう一つは、派遣されるものが「そこえ」派遣される目的地（terminus）に對する關係である。すなわち派遣するとは常に誰かを「どこかえ」派遣するのであり、彼がその「どこかえ」到達した時派遣の行爲は完成する。さてこの第一の意味を更に考察すると、誰かが誰かを派遣するとは、誰かが誰かのもと「から出て行く」ことであり、從つて派遣の概念のうちには、或ものの他者からの發出關係が含まれて居る。次に第二の意味

を更に考察すると、或ものが派遣の目的地に到達するとは、その地に於てそのものが、何らかの意味でこれまでなかつた新らしい存在仕方（modus existendi）をもつて存在し始めることに外ならぬ。要するに派遣の概念はそのうちに發出、及び目的地に於ける新な存在仕方の開始という二つの意味要素を含んで居るのである。(一) さてこのように派遣の概念を一般的に分析した後に、この概念がいかなる意味で神のペルソナに適用されるかを見よう。

子と聖靈とは父から發出するものである。故にこの二つのペルソナは、「他者からの發出者」として始原との關係を有する限りに於て、派遣される者としての第一條件に適合する。然しそれだけでは、この二つのペルソナが派遣されたものといわれるに十分でない。第二の條件がみたされねばならぬ。すなわち發出したペルソナは、これまであつたとはことなる新らしい存在仕方を以て、何らかの世界に存在し始めた時、はじめてその世界に派遣されたといわれ得るのである。たとえば子は、單に言葉として父から發出し、父と區別された自立者として永遠的に存立するというだけでは、派遣されたといわれるに十分でない。發出した子が肉をとつて被造物の時間的世界にあらわれ、そこにそれまでの神としての永遠的あり方と異る新なる時間的存在仕方を以て存在し始める時〔托身〕、はじめて子は父によつて地上の世界え「派遣された」といわれ得るのである。聖靈についても全く同樣である。聖靈が父と子とから「發出し」、永遠的に「自立して居る」というだけでは、それはまだ「派遣された」といわれるに十分でない。キリストの昇天後、聖靈が現實に弟子たちのもとに「くだり」〔聖靈降臨〕、弟子たちのもとに世の終りまで「とゞまる」〔教會〕ということがあつてはじめて、聖靈は父と子から地上の世界え「派遣された」といわれ得るのである。――このように、神のペルソナについて派遣ということがいわれるのは、この語が一面に於て派遣者からの發出を、他面にはその發出したペルソナが何らかのものに於て存在するその新らしい存在仕方を、意味する限りに於てである。(二)

(一) I q. 43, a. 1. in ratione missionis duo importatur; quorum unum est habitudo missi ad eum a quo mittitur, aliud est habitudo missi ad terminum ad quem mittitur. Per hoc autem quod aliquis mittitur, ostenditur pro-

cessio quaedam missi a mittente;...Ostenditur etiam habitudo ad terminum ad quem mittitur, ut aliquo modo ibi esse incipiat; vel quia prius ibi omnino non erat quo mittitur; vel quia incipit ibi aliquo modo esse, quo prius non erat.

(11) I q. 43, a. 1. Missio igitur divinae Personae convenire potest, secundum quod importat ex una parte processionem originis a mittente; et secundum quod importat ex aliqua parte novum modum existendi in aliquo. ペルソナの派遣（missio）という言葉は聖書にもとづく。たとえばヨハネ福音書第八章十六節に、「我獨に非ずして、我と我を遣し給ひし父となればなり」(Non sum ego solus, sed ego et qui misit me, Pater.) ガラテヤ書第四章十四節に、「滿期の時至りて、神はその御子を遣はし給えり」(Cum venit plenitudo temporis, misit Deus Filium suum). ヨハネ福音書第十四章二六節に、「父の我名に由りて遣はし給うべき繙護者たる聖靈は」(Paraclitus autem Spiritus Sanctus, quem mittet Pater in nomine meo,....)——また派遣は單に托身や聖靈降臨の如き可視的仕方で行われるのみならず、また不可視的仕方でもありうる。I q. 43, a. 3-7. 參照。

以上によつて派遣の概念を説明したから、次にエクシステレという語はペルソナの派遣について、いかなる意味で用いられるかを考察しよう。——派遣とは、發出したペルソナが何らかのものに於て（in aliquo）新なる存在仕方を以て存在し始めることである。そしてこの「何らかのものに於て」ということは、ペルソナの永遠的發出ではなくたゞ時間的發出についてのみいわれ得る。時間的發出に於ては發出したペルソナは、「被造的世界に於て」（in creatura）新なる存在仕方を以て存在し始める。而して被造的世界に於て存在するとは、常に時間空間的ないし歴史的現實的に限定された「そのときそこに」存在すること、すなわち Da-sein することである。從つて神のペルソナが派遣されて、被造的世界に新な存在仕方（modus existendi）を以て存在し始めるという場合のエクシステレの仕方は Da-sein に外ならぬ。ところがこれに對して、永遠的發出に於て、發出したペルソナがエクシステレするといわれる場合、このエクシステレは、神のペルソナがどこかに Da-sein することを示すのでなく、たゞ他のペルソナと區別された自立性をもつてあることを示すにすぎぬ。從つて永遠的に發出するペルソナは、「何かに於て」エクシステレ

するとはいわれない。故にそれは派遣されたとはいわれない。それ故同じペルソナの發出についてエクシステレということがいわれるにしても、永遠の發出について用いられる場合は、それは「―から出てきて―（他者と區別されたペルソナとして）―自立して居る」ことを示すだけだが、派遣に關して用いられる場合には、それは「―から出てきて―（被造的世界の歴史的現實的に限定された）そこに―存在して居る」というDa-seinの意味を含むことになる。(三)

（三）ドイツ語のDa-seinにあたる適當な譯語はない。それは或定められた「そこに、そのところに、限定されたものとして、あること」である。通常、現存と譯されるが「現」という語は現實（Wirklichkeit）、現在（Gegenwart）などの意味にとられやすい。然し適當な譯語がないからDa-seinは現存、In Gegenwart-seinは現在、In Wirklichkeit-seinは現實存在と譯すことにする。

以上に派遣の概念と、派遣について用いられるエクシステレの意味とを説明したから、次にその意味で用いられるエクシステレの實例をあげよう。

（a）命題集註解第一卷十五區分三論題一項に、「聖靈が派遣されたということ、その意味はすなわち、聖靈が他者から出て、思寵によつて被造物のうちにエクシステレする有（ens ab alio existens in creatura per gratiam）になつたということである」(四)云々。――さてこのエクシステレを我々はどのように解すべきであるか。我々は一應それを「―から出てきて―のうちにエクシステレする」というように前後に關聯づけたのであるが、原文ではこのエクシステレは「他者からエクシステレする」（ab alio existens）と前の語にかけることもできるし、また、「被造物のうちにエクシステレする」（existens in creatura）と後の語にかけることもできる。もし前の語にかけるとすると、それはこれまでペルソナの發出について考察してきた諸用例に於けると同樣、ペルソナの發出關係（―から出てくる）と、自立性（―として自立して居る）とを示す筈であるが、後の語にかけるとすれば、それは被造物「に於て存在する」という現存（Da-sein）の意味となる。我々はこのエクシステレをどちらにかけて譯すべきか。前の語にかけれ

ば後の語との關聯がきれるし、後の語にかければ前の語との關聯が浮き上る。かくて我々はさきにおちいつたと同樣のディレンマにおちいるのである。――さてこの問題も、もし二者擇一の立場を取つて、前にかけるか後にかけるかの一方に決定しようとする限り絶對に解決される筈はない。たゞ綜合の立場を取つて、このエクシステレは前にも後にもかゝる、すなわちそれは、「他者から出てきて―自立的に（ab alio existens）―被造物のうちに―現存して居る（existens in creatura）」というように、エクシステレの意味を二重にとることによつてのみ解決されるであろう。いや實をいえばこの場合エクシステレの意味は決して二重ではない。この語のとり得る可能的意味がこの場合は殆んど完全に現實化して居るのであつて、エクシステレという語の意味としては一なのである。〔この語の可能的意味については本論文第二一章・哲研四三八號・五八頁參照〕

（四） I Sent. d. 15, q. 3, a. 1. Sensus ergo est: 《Spiritus Sanctus est missus》; id est, factus est ens ab alio existens in creatura per gratiam.

（b） この（a）例に於けるエクシステレと、前章〔第二五章〕の㈡の場合の諸用例に於けるエクシステレとを比較して見よう。たとえば前章の（a）例のエクシステレは、聖靈が子「から出てくる」ことと共に、聖靈として「自立して居る」ことを示して居る。すなわち「―から出てきて―自立して居る」ことを示して居る。故にエックスの意味もシステレの意味も強い。ところが本章の（a）例に於けるエクシステレは、「―から出て―自立的に―現存して居る」ことを示して居る。すなわち前例に更に「現存性」の意味が加わつて居る。「―から出てくる」の意味が殘存して居るからエックスの意味はまだ強いが、現存性が附加されることによつてシステレの意味は更に強まつて居る。ところが次の諸例に於ては「―から出てくる」の意味は消えて從つてエックスの意味は弱まり、そのかわり自立性と現存性とが含まれてシステレの意味は強まつて居る。故に我々はこれを㈢エックスの意味が弱まつてシステレの意味だけ強い場合として、第一群の㈡に對應せしめることができよう。それは次の諸用例である。

（c）すなわち神學大全第一部四三論題一項に、「派遣ということは……他面に於て何らのものに於ける新らしいエクシステレの仕方（novus modus existendi in aliquo）を含意して居る」[五] 云々。また同第二項に、「神のペルソナが被造物のうちに新らしいエクシステレの仕方である（novus modus existendi in ea）ことは何らかの時間的なことである」[六] 云々。また命題集註解第一卷十五區分三論題三項異論解答二に、「派遣は何らかのものに於けるエクシステレの新しさ（novitas existendi in aliquo）を措定する」[七] 云々。――これらの用例に於けるエクシステレの意味は（a）例の如くその解釋に苦むことはない。なぜならこれらの用例に於ては、エクシステレは起原からの發出の意味を失つて、もつぱら「被造物に於て存在すること」すなわち現存の意味に用いられて居るからである。故にこれらの用例に於けるエクシステレは、第二群の㈢エックスの意味が弱まりシステレの意味のみ強い場合に入る。この時エクシステレの意味は「自立的に現存して居る」ことである。

（五）I q. 43, a. 1. et secundum quod importat ex alia parte novum modum existendi in aliquo. 英譯第一卷 a new way of existing in another (p. 220) 獨譯第三卷 eine neue Daseinsweise in irgendeinem (s. 314) 佛譯第二卷 un nouveau mode d'existence. (p. 195).

（六）I, q. 43, a. 2. Personam autem……esse novo modo existendi in ea [creatura], est quoddam temporale.

（七）I Sent. d. 15, q. 4, a. 3, ad 2. missio ponit novitatem existendi in aliquo, et ideo non potest esse creatura.

以上のように我々は、三位一體論の用例に即してエクシステレの用法とその意味の變遷を辿つてきた。㈠まづ或ペルソナが他のペルソナ「から出る」ことを示すエクシステレ。これはエックスの力が強く、システレの意味が弱い場合である。次に㈡或ペルソナが他のペルソナ「から出て」そのペルソナとして「自立して居る」ことを示すエクシステレ。これはエックスの力もシステレの力も等しく強い場合である。その特殊な場合として、或ペルソナが他のペルソナ「から出てきて」そのペルソナとして「自立的に」被造的世界に「現存する」ことを示すエクシステレ。これはエックスの力も強いがシステレの力の特に強い場合である。更に㈢ペルソナが自立的に被造物のうちに「現存する」

ことを示すエクシステレ。この場合はエックスの力は表面の意味から消えてシステレの意味だけ強くなつて居る。―このような意味の變遷を三位一體論の用例に即して我々は考察してきた。この三つの場合は、第一群のはじめの三つの場合にそれぞれ對應する。そしてペルソナについてエクシステレがいわれる場合はこの三つの場合以外にはあり得ない。

然しながらこのエクシステレの意味の系列を、ペルソナに關するこの語の用法だけに限らず、廣く一般的にエクシステレの用法の系列として眺めることも可能である。なぜならばこれらの意味のうちたしかに㈡の意味だけはペルソナにのみ固有であるが、㈠と㈢、すなわち「―から出てくる」と「―に於て現存する」との意味でのエクシステレは單にペルソナに關してのみならず、廣く一般的に用いられるものだからである。そこでこの第二群の系列を、一應ペルソナとの關係からきりはなして、一般にエクシステレの意味の發展系列として眺める立場に立つと、第一群の㈣に對應して、この第二群に於ても㈣の場合を、すなわちエクシステレのエックスの意味もシステレの意味も一般化し稀薄化した場合を措定することができる。では第二群の㈣にあたるエクシステレの意味はいかなるものか。これは㈢の Da-sein の Da- がとれたもの、すなわち現存の現がとれたもの、つまり最も一般的な平凡な意味での「存在」「―がある」であろう。かくて我々はエクシステレの意味の第二群として、㈠「―から出てくる」㈡「―から出てきて―自立して居る」㈢「自立的に―現存して居る」㈣「存在する」を得る。而して第一群がエクシステレの意味に含まれて居る「生成」の契機を中心にして整理されたこの語の意味系列であるに對し、第二群は同じくエクシステレの意味のうちに含まれて居る「自立性」の契機を中心として整理されたこの語の意味系列である。故に第一群に㈣に置かれた「存在」の意味が、たといきわめて一般的なかたちにせよ「生成」の意味を含んだものと解されるように、第二群の㈣に置かれる限りの「存在」の意味は、何らかの意味での「自立性」を含意して居ると考えられる。（未完）

（筆者　大阪市立大學文學部〔哲學〕助教授）